

太田忠司

TOKUMA NOVELS

本格推理

狩野俊介の肖像





TOKUMA NOVELS

太田忠司

狩野俊介の肖像

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 郵便番号一〇五-五五

電話三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇〇-四四三九二

©Tadashi Ōta 1996

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

編集担当 吉川和利

ISBN4-19-850352-4

太田忠司

TOKUMA NOVELS

本格推理

狩野俊介の肖像



ISBN4-19-850352-4

C0293 P800E (0)

定価＝800円(本体＝777円)



1910293008005



かのう しゅんすけ
狩野俊介の肖像
しょうぞう

おおた ただし

太田忠司

中学生探偵・狩野俊介が活躍するシリーズ第一作『月光亭事件』の刊行が91年6月。以来、本書が第九作目となった。今回は、これまでヴェールに包まれていた俊介クンの中学校での生活がついに明らかに！ ファンの要望に応えた自信作である。

TOKUMA NOVELS

本格推理

狩野俊介の肖像

太田忠司



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

金糸雀カナリアは、もう鳴かない

7

誰も気づかない 誰も傷つかない

69

人が歩む、すべての道は

125

秋しゅう 雨う

181

あとがき

223

本文挿画・末次徹朗

金糸雀^{カナリア}は、

もう鳴かない

1

その月曜の朝、遠島寺美樹^{えんとうじ みき}はいつもより早く家を出た。

二学期が始まって二週間あまり、夏休みの間に抜け落ちてしまった時間の感覚もようやく戻ってきていた。それでも、たまの早出がある日は、起床してから家を出るまで慌^{あわ}ただしい時間を過ごさねばならないのが、少々辛かった。

特にその日のように、本来は自分が早出をする番ではないのに、他人の都合でそうしなければならな
いとなると、いくらかは億劫^{おっくう}さを感じずにはいられ

ない。

しかし美樹は、そんな後ろ向きな気持ちを心の奥に押さえ込んで、学校への道を歩きはじめた。代役を買って出たのは自分自身だったからだ。

美樹の家から学校までは、徒歩で二十分ほどだった。途中で小さな公園を突っ切り、細い路地と大きな車道が交差する十字路を通る。

その十字路で美樹は、一旦歩みをとめた。そしていつものように車道のほうに眼をやった。小さな乗用車が路肩に停められている以外、人の気配もなかった。

「あ、そっか……」

美樹は舌打ちをした。いつもより三十分早くこの

場にきたことを、そのときだけ、すっかり忘れていたのだ。

「……馬鹿みたい」

彼女は苦笑まじりに呟くと、再び歩きはじめた。

朝の陽射しは、少しずつ秋の気配を増してきていた。半袖の腕や頬に触れる風も、いくらか涼しく感じられる。しかし空を見上げれば巨大な積乱雲が伸び上がって、夏が完全に過ぎ去ってはいないことを告げていた。たぶん昼過ぎ頃になれば暑くなってくるだろう、と美樹は思った。

学校の校門が見えてきた。周囲を取り囲む塀と同じ赤煉瓦で造られた門柱には、「新星中学」という文字を刻印した銅板が埋め込まれている。彼女が今年の四月から通っている学校だ。重い鉄の門は、すでに開かれていた。

校庭では野球部と庭球部の部員たちが、早朝の練習をはじめていた。美樹は彼らの邪魔にならないよ

う、校庭の隅を通って校舎に向かった。

南校舎一階の向かって右から四番目の部屋が、美樹のいる一年四組の教室だった。まだ誰も来ていないようだった。

自分の机の上に鞆を置くと、美樹はすぐに教室を出た。

通路を渡って北校舎へ向かった。校舎一階の端に用務員室がある。

「おはようございます」

美樹は声をかけてから扉を開いた。

用務員は長瀬という六十歳すぎの男だった。

「おはよう。今日も早いね」

長瀬は口に持っていていきかけていた湯飲みを置くと、柔和な笑みを浮かべた。そして部屋の壁に掛けてある木箱の錠を外すと、蓋を開けた。そこには学校内の各施設の鍵がまとめて保管されている。

長瀬はその中から「禽舎」と大きく書かれた木札

のついた鍵を取り出した。

「ほい」

「ありがとうございます」

美樹は鍵を受け取ると、もう一度丁寧に頭を下げて用務員室を辞した。

南校舎と北校舎の間に中庭がある。美樹はその中庭に足を踏み入れた。

「あれ？ 遠島寺さん？」

不意に名を呼ばれ、美樹はふりかえった。南校舎と北校舎を結ぶ通路に、顔見知りの男子生徒が立っていた。

「あ、里山先輩」
さとやま

「どうしたの？ こんなに早く」

里山と呼ばれた男子生徒は、ゆっくりと美樹のほうに歩いてきた。三年生の中でも長身の部類に入るのであろう里山は、不思議そうな表情で彼女を見ていた。ほっそりとした知的な顔立ちに、縁のない眼鏡

が似合っていた。

年上であるせいかもしれないが、美樹にはそんな彼がとても大人びて見えた。

「あ、あの……今朝は早出だったんです。飼育部の……」

返答が妙にしどろもどろになってしまい、美樹は内心焦あせっていた。

「飼育部の？ だって君は、土曜日にも早出で来てたんじゃないかったの？ たしか今日は堀内ほりうちの当番じゃ……」

「はい、そうなんですけど、今日は代わりなんです。堀内先輩の」

「堀内、どうかしたの？」

「昨日の夜、電話があっただんです。風邪で熱がひどくて学校に行けそうにないから、早出を代わってほしいって」

「へえ……そうなのか」

里山は納得したように頷いた。

「先輩は、どうしてこんなに早く学校に来たんですか」

美樹が尋ねると、里山は薄く微笑^{ほほえ}んだ。

「新聞を締切に間に合わせるためさ。週に何回かは早めに学校へ来て仕事をしないといけないんだ。学校じゃ徹夜で新聞編集をさせてはくれないからね」
「そうなんですか。大変ですね」

里山^{たつお}龍夫は新聞部の部長だった。部で制作している「新星新聞」は月刊の学内新聞で、校内の行事や出来事、生徒や倶楽部^{クラブ}の紹介などを掲載している。

「いや、僕らより飼育部のひとたちのほうが大変だと思うよ。夏休みや春休みにも交代で出てこなきゃいけないし、こうやって早出もしなきゃならないしね。よく続けられるもんだと感心してるんだ」

「そんな……」

美樹は頬が熱くなるのを感じていた。

「どうして飼育部みたいな大変な倶楽部に……ああ、この質問は先週したんだよね？」

「ええ……あの記事、まとまったんですか」

「いや、それを今朝、やりにきたのさ」

里山は苦笑を浮かべる。

先週の土曜、美樹は里山の取材を受けていた。新聞に載せる倶楽部紹介の記事のために、彼女が部を代表して活動内容について話したのである。入ったばかりの、ましてや部長でもない彼女が取材を受けることになったのは、たまたまその日が彼女の当番日であったからだだった。里山の意向で美樹は実際に禽舎での仕事を見せながら、彼の質問に答えたのだった。

里山に飼育部に入部した動機を訊^きかれたとき、美樹はこう答えた。

「もともと動物が好きだったからです。それと家で、生き物を飼えないから」

美樹は母方の祖母である広瀬幸子とふたり暮らしをしていた。その幸子が生き物を飼うことを好まず、美樹はいまだかつて自分で動物を世話したことがなかったのだった。だから中学に入ると、迷わず飼育部を選んだのである。

入部してみると他の部員たちも同じように、生き物が飼いたくても飼えない状況にある者ばかりであることがわかった。当然そうした生徒の数はそれほど多くはないので、飼育部員の数も三学年合わせて五人という、いささか寂しいものだった。その分、部員たちの負担も大きくならざるをえない。今朝のようにひとりが病欠すると、誰かが続けて早出当番をしなければならなくなるのだ。

「でも、いいんです。生き物と一緒にいるのが好きですから」

美樹は自分がそう答えたことを思い出した。少しばかり格好をつけすぎた言いかただったような気が

して、美樹はまた赤面してしまった。

「じゃあ、あたし、行きます」

美樹は自分の狼狽を気取られないよう頭を下げると、急いで里山から離れた。

中庭の一番東の端に、飼育部の禽舎があった。長さ三メートル、幅二メートル、高さ二メートルほどの、結構大きな建物であった。

その禽舎の中で現在、金糸雀が四羽飼われていた。禽舎の大きさに比べると飼育数が少なすぎるのだが、先輩の話によると以前はもっと色々な種類の生き物がたくさん飼われていたのだという。中にある池はそのときの名残で、昔は亀を飼っていたらしい。しかし飼っていた生き物が死んだ後、あらたに補充されることがなかったせいで次第に数を減らし、現在のような寂しい状況になってしまったということだった。

飼育部ではこれまでも何度か飼育する生き物を

増やしたいと申請したのだが、色よい返事はもらえなかった。どうやら学校としては、これ以上動物を増やすつもりはないようだった。小学校ならともかく、中学で飼育禽舎があるのは、この街の中学ではここだけらしい。

「先生がたは、それを名誉とは考えずに、恥だと思つてゐるらしいのよね」

部長が一度、美樹にそう言ったことがある。

「だから早いとこ禽舎をなくして、飼育部もお取り潰しにしたいのよ。一応、今いる鳥たちが元気なうちは、そんなことはしないって約束は取りつけてあるんだけど……学校側の目的が達成されるのも、そんなに遅くはならないかもしれないわね。あの子たち、そろそろ寿命だし」

金糸雀がいなくなったら、飼育部は潰される。その言葉を思い出すたびに、美樹の胸にはしこりのような喪失感が生まれてくるのだった。

彼女はそんな嫌な気分を振り払うように、禽舎に向かつて駆けた。

が、禽舎が近づくにつれて、美樹の歩みは遅くなっていった。何かわけのわからない違和感が、金網を巡らせた禽舎のほうから漂ってくるように思えたからだ。

何だろう、何が変なんだろう……美樹は訝いぶかりながら禽舎に近づき、そしてとうとう足をとめた。違和感の正体に気づいたのだ。

鳥の声が、聞こえない。

いつもなら、禽舎に近づくにつれて金糸雀たちの声が耳に届くはずだった。ここで飼われているのは特に鳴き声を樂しむために品種改良された「鳴き金糸雀」と呼ばれる種類のもので、いつも麗々しい歌を聞かせてくれている。しかし今、禽舎からは静寂しか伝わってこない。

美樹は眼を凝らした。そして次の瞬間、その眼を

大きく見開いた。

金糸雀の姿が、なかった。

美樹は金網に顔を押しつけんばかりにして、中を覗き込んだ。やはり、どこにも姿が見えなかった。

禽舎の中には巣箱が掛けてある。その中に入っているのなら、見えなくてもどうということはない。しかし今までの経験からすると、この時間に金糸雀たちが巣箱に引き籠こもったままにいることは、一度もなかった。いつも飼育当番が来るのを待ちかねていたように止まり木の間を飛び回り、騒々しく鳴きつづけているのだ。

「……どうしたのかしら……？」

美樹は思わず呟ささやいていた。早く中に入って確かめねばならない。美樹は禽舎の鍵を握りしめた。

「遠島寺さん」

突然声をかけられ、美樹は危うく声をあげそうになった。

「あ、驚かせてごめん」

里山だった。

「ちよつと例の記事で補足したいことがあったんで、もう一度禽舎を見せてもらいたいんだけど……あれ、どうかしたの？」

美樹の様子が変であるのに気づいたのか、里山は首を傾かしげた。

「僕、驚かせすぎちゃったかな？」

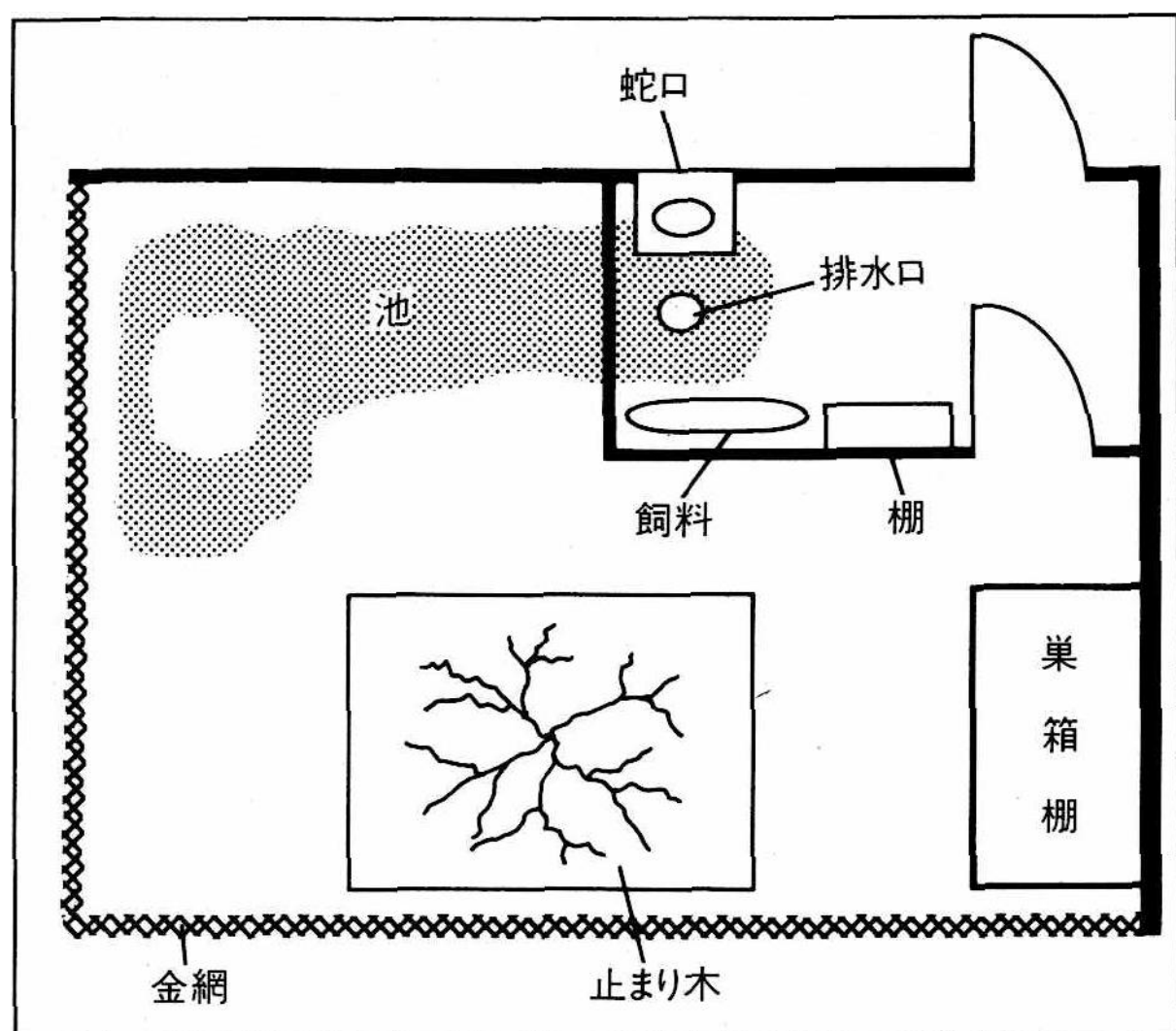
「いえ、そうじゃないんです。ただ……」

美樹はそれ以上答えることができなかった。自分の不安がただの思い過ごしなのかそうでないのか、確信が持てなかったからだ。

「ちよつと……待ってくださいね」

美樹はそう言うのと禽舎の裏へ廻り、出入口の扉にかけられた南京錠なんきんじょうに鍵を差し込んだ。自分の指の動きがもどかしかった。

「遠島寺さん、変だよ」



後からついてきた里山が怪訝けげんそうな口調で言った。
美樹はそれにも答えず、苦勞して錠を外すと扉を開けた。

出入口と鳥たちの住处すみかとの間には、鉄板で仕切られた準備室という名の小さな空間があった。いきなり出入口を開けて鳥が外に逃げ出さないようにするために設けられたもので、鳥の飼料や掃除道具等の保管場所も兼ねている。金糸雀の住处に入るには、出入口の向い側にある扉を開けなければならない。その扉には門かんぬきがかかっていた。美樹は門を外し、中に入った。

静かだった。やはり鳴き声はしない。美樹は背伸びをすると、巣箱の中を覗き込んだ。

金糸雀はいなかった。

「どうしたんだ？」

里山が入ってきた。

「……いないんです」